

聖書: エステル記1章13~22節

説教: 王の法令に従って

はじめに

エステル記の舞台はペルシャ帝国の中心地であったスサという都でした。時代で言えば紀元前480年頃のことになります。当時の政治や文化がどんなものであったのか、詳しく分かる人はまずいないでしょう。でもそのことを知っておかないと、エステルがたどった道がどんなに苦しみに満ちたものかがわかりにくい。そこでエステル記は、当時ペルシャ帝国の王であったクセルクセス王の即位を記念して開いた大宴会の様子を詳しく描くことで、当時、王の権威と力がどれほど大きかったかを、私たちにも分かるようにいたします。そしてまた、そのときまだ無名だったエステルが後に王の妃となっていったのは、王妃ワシュティが王の命令に逆らって宴会の席に出なかったという事件がきっかけであったことも明らかにしていきます。客の前で恥をかかされた王はカンカンに怒り、閣僚会議を開いてワシュティの処分を検討していく。それが今日の話です。

ここに登場するひとたちはすべて、異教の神々を信じる人たちです。けれども神は着実に働いておられ、人を救うために備えをしてくださっている。それはどんな備えであったのか。ご一緒に見てまいります。

1 王妃ワシュティのしたこと

1) 王に背いた

閣僚会議で王は次のように議題を説明します。15節。「王妃ワシュティは、宦官によって伝えられたクセルクセス王の命令に従わなかった。法令にしたがって、彼女をどう処分すべきか。」

考えてみれば、妻が夫の命令に従わないことは別に珍しいことではなくて、このときも王妃が宴会に来なかったのなら、「王妃は体調がすぐれないので」とか言ってその場を取り繕い、なにごともしなかったことにすることもできたでしょう。ところが、国家を揺るがす大問題だと騒ぎます。

2) 全住民に悪いことをした

王の問いかけに対し、ムムカンと呼ばれる大臣が答えました。「王妃は国全体に非常に悪いことをした。なぜならこのことを聞いた女たちが自分の夫を軽く見るようになるから。」この大臣は智慧のある者と言われている割には、発想は非常に

単純で、ようは男のプライドが許さないと言いたげです。

2 王の法令

1) 男子はみな一家の主人となること

会議の結果、王の法令を出して、全国民にそれを守るようにとお告げを出すことにしました。内容はこうです。22節。「王は、王のすべての州に書簡を送った。各州にはその文字で、各民族にはその言語で書簡を送り、男子はみな一家の主人となること、また自分の民族の言語で話すことを命じた。」

この法令は二つの部分からなっています。一つ目。「男子はみな一家の主人となること。」ひとことで言えば、妻は夫の言うことに従いなさい。女が出しゃばるようなことは認めない。なんとまあ時代遅れなと笑うでしょうが、つい最近日本でも、「会議に女性が入ると話しが長くなって困る」と言うような趣旨のことを発言した人がいて、大きな組織の会長を辞めたということがありました。とても笑えません。

2) 自分の民族の言語で話すこと

王が出した法令の二つ目。「自分の民族の言語で話すこと。」これについては、解釈がいろいろあるようです。しかし一つ目の法令と一緒に考えるならおそらくこんなことだろうと推測されます。ペルシャ帝国は東はインドから西はエチオピアまで広大な地域を支配していて、人の往来もたくさんあった。そうなるとう国際結婚が増えてきて、夫が話すことばと妻の話すことばが違うということも当然出てくる。国際結婚されている方はおわかりでしょうが、どちらの言語でお互い話すか。生まれてくる子どもにはどちらのことばを教えるか。結構大きな問題で、これはエステルの時代からあった。この問題について、クセルクセス王は法令を出し、「妻は、夫の母国語で話すように」と定めた。ことばも男性中心で一方的に決めてしまったわけです。

3 神の備え

1) 王妃の位は別の者に

ここまで王が出した法令の内容を見てきましたが、いったいこれが信仰とどんな関係があるのかと、いぶかるかもしれません。しかし、神の備え

という視点から観察するなら、ふたつのことが見えてくるのではないのでしょうか。一つは明るい部分で、ユダヤ人にとってはよいこと、二つ目はその反対で日陰の部分、エステルにとって大きな試練となること。この二つのです。

一つ目のこと、ユダヤ人にとってよいこととは何であったか。19節。「もし王がおよろしければ、ワシュティはクセルクセス王の前に出てはならない、という勅令をご自分でお出しになり、ペルシアとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないようにされてはいかがでしょうか。王妃の位は、彼女よりももっとすぐれた者にお授けください。」

ワシュティは王宮から追放し、代わりに別の女性に王妃の位を授ける。もしMEMKANがこのような提案をしなかったなら、どうなっていたでしょう。ワシュティがそのまま王妃の地位についていたのなら、当然のことですがエステルが王妃となることはなかったでしょう。それだけなら何も問題がない。ところがこの後、ユダヤ人にとって大きなわがわがが降りかかってくる。ハマンという王の側近が、個人的な恨みからユダヤ人大虐殺計画を立て、王の法令を出させて実行しようとするのです。どうやってこれを止めるか。エステルが王妃となっていなければ、だれも止めることのできる者はいなかった。ただ一人王妃エステルが止めることのできる立場にあった。もちろん、MEMKANはそんなことは知るはずがなく、ただ王のためを表知恵を働かせて出した一つの提案に過ぎなかった。ところが後から振り返ると、まさにこの一言がその後のユダヤ人を救う大きなきっかけとなるのです。神は信仰者ではないひとりの人物をとおして、ご自身のご計画を成し遂げようとされる。そのように言うことができます。

2) エステルが通る試練 王の法令に背く

次に神の備えの二つ目。エステルにとって試練となっていく事とは何か。エステルは、王に逆らったらどうなるかをこの一件から学んでいたでしょうから、王妃となったときに、王に従うことについて細心の注意を払ったはずです。ところが、今言ったハマンの事件が起きて、エステルはユダヤ人大虐殺計画を止めるよう王にお願いする立場に置かれてしまいます。そのとき、エステルは大変困った。というのは、こういう法令があったからです。4章11節。「召されないのに奥の中庭に入って王のところに行く者は、男でも女でも死刑に処せられると

いう法令があります。ただし、王がその人に金の笏を差し伸ばせば、その人は生きながらえます。」

王から来なさいと言われていないのに、勝手に王の個室に入ろうとする者は、例え王妃であっても殺される。でも、ユダヤ人を救うためには、エステルはこの法令を破らなければならない。もちろん、王が笏を差し伸ばしてくれれば、殺されずに済みます。しかしそうしてくれるという保証はない。なにしろ、妻がパーティーに来なかっただけで、「夫を敬え」というような法令を国中に出すほどの王さまです。赦してくれるとはとても思えない。王が法令を出したこと。このことはユダヤ人には、大きな神の備えでしたが、エステルにとって苦しみの備えとなります。

3) エステルが通る試練 王の信じる宗教に背く

それだけではありません。エステルの試練はもう一つある。王が出した法令の二つ目に書かれていたことと関連します。「自分の民族の言語で話すこと。」先ほどは、国際結婚したら、妻は夫の母国語で話せ、そのような意味だと言いました。ことばは文化や風習と強く結びついていますから当然宗教と切り離すことはできない。つまり妻は夫の信じる宗教に従えと言っているのと同じ。

後から出てきますが、エステルは王妃となるとき、当初自分がユダヤ民族であることをだれにも明かさず、隠しております。ところが、エステルは召されていないのに王の個室に入って、ユダヤ人を救って欲しいと王に願い出なければならない。そのとき、自分がユダヤ人であることを明らかにし、私はユダヤ人を救う神を信じているのだと告白することにもなる。つまり、王である夫の信じる宗教に自分は従えないと言うのと同じ。エステルがいかに厳しい道を通らなければならなかったのか、これでおわかりでしょうか。

4) イエス・キリストが歩んだ道

ここで疑問が湧いてきます。神は備えてくださるというのであれば、エステルがこのような厳しい道を通ることがないようにと、備えるべきではないか。そう考えたくになります。神のみこころを推し量ることはできません。しかし一つだけ分かることがあります。エステルが歩んだ道は、イエス・キリストが歩まれた道と同じではないですか。人を罪から救い出し、永遠のいのちを与えるために、神である方がなぜ十字架で苦しみ、死ななければならなかったのか。それは私たちには説明ができないことです。わかるのは、神の子である方が私た

ちのために自ら進んでご自身のからだを献げてくださったことだけ。やがて来られるイエス・キリストが、すべての人々とを救うために、どれほどに苦しまなければならないのか、エステルを通して私たちに教えようとされていた。そういうことが言えるのではないのでしょうか。

私たちも時々思うことがあります。私はこのトラブルにはなにも関係ありません。それなのに、なぜ私が巻き込まれて、私が苦しまなければならないのか。苦しむべきなのは、別の人たちではないですか。私はかつてそういうことを何度も言っていました。しかしあるとき、ふとイエス・キリストのことを思い出したのです。私は関係ないと言っていたけれど、イエスはどうかであったか。この方は私の罪を私に代わって背負ってくださったのです。この方は、私に代わって十字架でさばきを受け、苦しんでくださった。この方は、苦しみというところを通ることで、どこまでも私たちと結びつこうとされ、私たちから絶対に離れようとはしません。

エステルを通して、イエス・キリストのみわざを思い起こしてまいります。